

小-34

移行上皮癌に対する膀胱尿道全摘出後に尿管-乳頭造瘻術を実施した犬の2例

○井上 公¹⁾ 谷川慶一¹⁾ 河野博紀²⁾ 酒井俊和¹⁾ 廉澤 剛¹⁾

1) 酪農大伴侶動物医療学 2) 酪農大附属動物医療センター

【はじめに】犬の膀胱移行上皮癌は膀胱三角に最も多く発生し、外科治療としては膀胱全摘出術が考慮される。雌犬の場合、膀胱全摘出術の尿管吻合部位に関しては様々な報告があり、吻合部位によっては上行性の細菌感染など合併症の報告がある。今回、膀胱から尿道および膣に浸潤した移行上皮癌に対し膀胱尿道全摘出後、尿管-乳頭造瘻術を実施した2例を経験したため、その概要を報告する。

【症例1】ミニチュア・ダックスフンド、13歳齢、避妊雌、体重3.75 kg。7カ月前から血尿と頻尿を認め、血液化学検査にて腎機能の低下を認めたので、本学附属動物医療センターを受診した。初診時、逆行性膣-尿路造影検査にて尿道全域で造影は不整であり、超音波検査にて膀胱頸部から尿道の不整と肥厚を認めた。細胞学的検査にて移行上皮癌と診断された。第12病日に膀胱尿道全摘出を実施し、摘出後、左右尿管と膣をY字に吻合した。また左右内側腸骨リンパ節摘出も実施した。病理組織学的検査にてリンパ節転移はなかったが、膣におけるサージカルマージンが不完全であったため、第16病日に膣を拡大切除し、左右尿管を頭尾側方向で2分割した左右第4乳頭間へ吻合する造瘻術を実施した。再切除においても膣のマージンが不完全であり、また腹腔内播種のリスクが高いため、カルボプラチンの腹腔内投与を実施した。第257病日現在、吻合部の狭窄や細菌尿は認められていない。

【症例2】マルチーズ、14歳3カ月齢、避妊雌、体重3.22 kg。1カ月前より少量頻回尿との主訴で本学を受診した。初診時、逆行性膣-尿路造影検査にて尿道全域で造影は不整であり、超音波検査にて膀胱三角部に腫瘤を認めた。第10病日に病理組織学的検査にて移行上皮癌と診断された。第17病日に膀胱尿道全摘出と膣部分摘出を実施し、症例1と同様に尿管-乳頭造瘻術を実施した。病理組織学的検査にてマージンが完全であり、リンパ節転移は認めなかった。第168病日現在、吻合部の狭窄や細菌尿は認められていない。

【考察】これまで膀胱から尿道に移行上皮癌がある場合には、膀胱と尿道を全摘し尿管を膣に吻合していたが、膣まで腫瘍の浸潤が疑われる場合には、子宮や膣の摘出も積極的に考慮する必要がある。乳頭は被毛に覆われないことから尿管開口部の清潔さが保たれ、また皮膚上皮の進展による狭窄を予防することを期待し本術を行った。いずれの症例でも合併症を認めず、尿管吻合部位として選択肢の一つになると考えられた。